

土曜時評

1、自然の道

「冬来りなば春遠からじ」。厳しい寒さの中にも梅のたよりをきく季節となった。明後日は立春である。広島・縮景園の梅も、やがて咲きそめることであろう。

百花にさきがけて咲く梅は、今年もまた厳しい寒さの中で、花開く準備をしていたのである。古人は、霜辛雪苦にもひるまないで、咲く梅をめめているが、私たちも、霜雪の厳しさの中で花開く準備を怠らない梅の心を学びたいと思う。

梅の季節は、また受験シーズンでもある。広島県下の大学・短大の入試も、この時期に集中している。受験生の多くは、艱難辛苦にひるむこともなく、来る日を目ざして、準備を怠らせず精進してきたことであろう。その精進は、必ず合格という花を咲かせるに違いないと思う。

ところで、受験生が目ざす大学は何をするところであろうか。



昭和42年 国文学会信州研修旅行

それは、世界の平和と人類の幸福を究極の目的とする知識・道徳を修めるところである。ところが、「知識を捨てよ、道徳を捨てよ、そして自然の道に帰れ」と叫んだ思想家がいる。老子である。老子によれば、自然の道に反し作爲的に身につけた道徳は、見せかけの装飾と同じで欺まんにみちているというのである。

私は、この考え方の中に、二十一世紀に生きる人間の生き方が示唆されているのではないかと思う。

現代社会は、科学技術の進歩によって、人間の生活は便利になり快適にはなってきた。また、倫理道徳の高揚によって、人間の社会は秩序ある健全なものになってきた。しかし、その一方で、核の脅威におびえ公害に悩み、性犯罪がまん延し、暴力ざたが後をたたないのも事実である。それは、人間が、自然の道に反し、人為的作爲的に操作をして科学技術を独り歩きさせ、見せかけの倫理道徳で外形を飾ってきたからではなからうか。

老子が否定した知識・道徳は、この独り歩きする科学技術と見せかけの道徳なのである。もし、それらを、なお許すとすれば、宇宙世界は遠からずして瓦解し、人類社会は欺まんと偽善でみたされることにならう。

ここで大切なことが明らかになったと思う。それは、人為を捨てて自然の道に従うことである。春花が咲き、秋もみじするという自然の道に従って生きること、それこそが老子の道であり、二十一世紀に生きる人間の生き方でもなければならぬ。私はそう思う。

中国新聞（夕刊）・土曜時評（昭・60・2・2）